中等部・高等部

探求

近藤紫織

本格的に中高全体で取り組む探求は 5 年目を迎えた。2024 年度のスタイルを踏襲しつつも、試行錯誤を重ねながら 2025 年度の探求を実施した。今年度も毎週土曜日の 2〜4 時間目を探求の授業として時間割に位置づけ、中高の教職員、最高学部の教員、株式会社トモノカイの協力のもと、自己探求・テーマ探求・自由探求の三つを柱として学びの体系を構築した。

今年度も自由学園の探求は「生徒それぞれの興味や問題意識から出発し、自ら問題を発見し、主体的・協働的に学び、問題解決に向かう力を養う」（2025 年度版自由学園パンフレットより）という目的を掲げた。昨年度までと同様、「探究」ではなく「探求」の字を用い、「その問いが生涯を通じた『真理の探求』『生きる意味の探求』につながるように」という願いのもとに実践した。以下に、取り組みと試行の過程を記す。

Ⅰ.はじめに

学びが独りよがりに閉じることなく、社会に開かれた形で循環していくことを目指すならば、一方向ではない発表の場は不可欠である。探求を考える上で、「学びの共有会（まなびのコレクション＝まなコレ）」はその中核を担う存在である。

一方で、生徒が自ら学びを選択することで生まれるコンフリクトは、生徒自身が比較対象となるアウトプットの場を過去の行事形式では経験していないこと、教員体制の変化、行事の多忙さといった要因の中で、課題として顕在化した一年でもあった。

2019 年度まで本校で行われていた「学業報告会」は、現在のまなコレの前身にあたるが、テーマ設定の主体は大きく異なる。学業報告会では学年単位の学習を基盤とし教員が主導していたのに対し、まなコレでは異年齢の関わりの中で、生徒自身がテーマを設定する（テーマ探求をのぞく）。2018 年度・2019 年度は移行期として両者の中間的な形式が試みられ、生徒は自らの学びの深度を引き受けることと向き合い、教員も手探りの中で生徒とともに運営にあたった。生徒主体で行事を創り出す実感と、それを共有する喜びが見られた時期でもあった。

その後、当時の生徒の卒業と 2020 年度のコロナ禍を経て、2021 年度より現在のまなコレが始まり、年度ごとに試行錯誤が重ねられてきた。自由学園の学びは、日常のあらゆる場に広がっている。1 年間の学びを成績として閉じるのではなく、「開かれた」場で発信し、来場者との応答を通して新たな気づきや学びを生む。この循環こそが、共に生きる力を育て、学び続ける喜びにつながっていく。まなコレはそのための場である。

本年度は、十分に時間をかけて探求を深めた生徒がいる一方で、取り組みが不十分な生徒も一定数見られた。その結果、まなコレ（春）終了後に中高全体で「まなコレ共有会」を実施するという新たな展開につながった。

なお、探求の基本的な特徴や外部連携については年報第 28 号（2024 年）に詳述されている内容と大きな変化がないため、本稿では本年度の実践に焦点を当てる。

Ⅱ. 年間の流れ

2024 年度の共生共学化に伴い、3 学期制から 2 学期制へ移行した。これにより 2025 年度の探求も、春期と秋期の二期構成で展開された。自己探求・テーマ探求・自由探求の三領域から選択する基本的な枠組みは継続している（図 1-1・図 1-2）。

4 月から 9 月までは、継続して探求に取り組む生徒、別プログラムで学ぶ中 1、時間割上探求の時間が設定されていない高 1 という三層構造となった。探求の大きな発表機会が年度単位で区切られない構成には、学びの連続性という利点がある一方、新入生にとっては理解の難しさも伴った。

9 月 27 日・28 日にまなコレ（秋）を実施し、その振り返りを

もとに、11 月から 12 月にかけて高 1 を除く 5 学年で基礎講座を 4 回実施した。1 月以降は従来の探求に戻し、3 月 7 日・8 日にまなコレ（春）を行った。

Ⅲ. 春期

春期は、探求の導入と基盤形成の期間である。中 1 は別プログラムを通して探求的な学びに触れ（図 1-3）、高 1 はまなコレ準備期間の約 3 日間で、学校紹介をテーマに自らの学びを言語化するポスターを作成した。部活動、教員、寮生活、授業、礼拝等多様なテーマを扱い、これらは学校説明会等でも活用された。

春期の振り返りでは、主に教員から基礎的な力の不足、アウトプットの形式への知識不足が共通の課題として認識された。

Ⅳ. 秋期

11 月から 12 月にかけて全 4 回、土曜日の 2 時間目に基礎講座を実施した。まなコレ（春）で見えた課題を解決するために、目的は「短期的に改善可能な基礎力の育成」とした。講座担当は各学年の担任が担った。

中 1・中 2 は探求のイメージ形成、中 3 は問いの再検討、高 2 は論文指導や初等部発表会見学を通じた学びの接続、高 3 は論理国語と連動した自治の考察を行った。

なお高 1 は別授業があり、基礎講座を組み込むことができなかった。

この取り組みは教員の負担増を伴ったが、授業改善の契機となった側面もある。一方で、すでにテーマが定まっている生徒にとっては有効性に課題があり、多角的な視点を促す意義との間で調整の必要性も見られた。そのため、3 学期は従来の形に戻し、3 時間連続での探求を実施した。

Ⅴ. 学びの共有会（まなコレ）

まなコレの開催時期については、春秋 2 回開催を継続したが、秋開催は体操会や黎花祭（文化祭）と重なり、生活や学習の両面で負担が大きいことが明らかになった。結果として、2026 年度からは春 1 回開催（2023 年度以前と同様の形態）へと見直すこととなった。

また、発表の質やプロセスに関しては、外部の手法の導入や、アウトプットの形式を先に学ぶ必要性が教員間で共有された。 来場者数は次のとおりである。

●まなコレ（秋） 1128 名
●まなコレ（春） 953 名
（いずれも 2 日間の合計来場者数）

Ⅵ.まなコレ共有会

まなコレ（春）終了後、3 月 13 日の 1 時間目に中高全員で記念講堂に集まり「まなコレ共有会」が行われた。まなコレ（秋）までは外部公開日の前日に「内覧日」として互いの発表を見合う機会を設けていたが、形式を大幅に変更しまったく新しい形での共有会を実施した。まなコレ当日は生徒が自分の発表や展示のシフトがあり、学園の敷地全体で行われている発表をすべて見るのは不可能であること、モデルケースの発表を聞き合うことで、生徒・教員ともに理想の学びを共有知として持ちやすくなることが開催の背景と目的である。当日は以下の内容で発表した。今回は初開催だったため、まなコレ運営チームの教員で発表者の選定を行った。

●共生学プロジェクト
①「つながるラボ」
②「WATS2026～逆転世界を作ろう～」
●飛び級社会人
③定期：センスオブファン
④短期：相思社
●探求
⑤「自由学園の自治の本質とは」

実施初年度としては、十分に目的を果たす時間となった。

Ⅶ. 今後に向けた課題

探求を支える基盤の整備が引き続き求められている。共生学との位置づけの整理、生徒の参加状況のばらつき、教員体制など、構造的な課題は依然として残る。

また、日常的な運営においても、出欠管理（BLEND）の運用、探求テーマの変更のたびに生じるデータ整理、高3の理数探究との兼ね合い、校外学習への手続き等改善すべき点がある。各教員が多くの生徒を担当する現状には負担の偏りも見られ、持続可能な体制の構築は喫緊の課題である。

Ⅷ.おわりに

現在、本校の探求は特定の教育手法のみに依拠するも

のではないが、近しい外部の学びとしては Project-Based Learning や Inquiry-Based Learning、International Baccalaureate（TOK 等）、さらに Design Thinking 等が挙げられる。問いの設定から表現、応答へと至る循環を重視し、学びを社会に開く実践として展開することを目指している。探求開始 5 年目を迎え、運営体制や指導の在り方など未解決の課題は少なくないが、それらは探求の深化のみならず本校の学びそのものの深化に向けた重要な論点でもある。

探求は高等部・中等部の教員 6 名（高等部から咲花昭嗣、鈴木雄紀、中本理櫻、渡邉祐太、中等部から五十嵐司、近藤紫織）で担当し、毎週の協議を通して運営の改善と学びの質の向上に努めてきた。また、職員会議においても議論を重ね、中高教職員全体で探求の在り方を模索してきた。

こうした試行錯誤の積み重ねの中で、生徒の学びは確実に変化の兆しを見せている。テーマとして取り上げられるものが、いわゆる社会問題へ切り込んでいくものばかりではなく、自分の好き・疑問から始まり社会との接点に気がついていく過程を経る生徒が多い（図 1-4）ことは、創立当初から掲げられてきた「生活即教育」の理念が時代を超えてなお革新的で本質的であることの証明に違いない。今後も実践と省察を往還しながら、本校にふさわしい探求のかたちを探り続けていきたい。

図 1-4

自由探求のテーマから各学年3人を紹介	
中1	線香花火を作る
	星野リゾートを通して宿泊文化を考える
	人間がリラックスできる空間ってなんだろう
中2	平安時代のスイーツについて
	寮を使いやすくする
	山本鼎と自由学園の美術教育について
中3	礼拝の演奏はどのような点に気を付けたら良いのか
	どうでもいいことから得られることはあるのか
	中等部のフードロスを減らす
高1	行動経済学の視点から自由学園を捉える
	キリスト教における「自由」「真理」について
	茶道の茶室について
高2	生徒が選ぶ自由学園の景観：写真撮影の観点から
	粉塵爆発を動力としたエンジン作り
	子どもの居場所と学びについて
高3	創立者羽仁もと子からみた共学化
	水車の作成による学園内の動力元の確保
	鳥の構造色についてと剥製作成

最後に、2025 年度の探求に関わり支えてくださったすべての方々に、心より感謝を申し上げて結びとする。

図 1-1

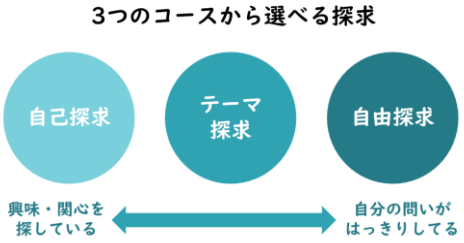
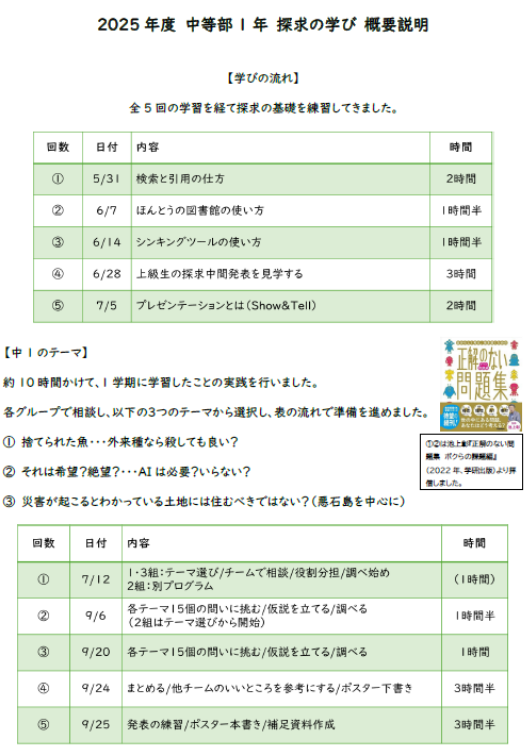


図 1-2

4）秋期のテーマ探求一覧

	担当者	探求のタイトル
1	奈良忠寿	縄文時代を探る
2	遠藤 敏喜	データサイエンスの入門から活用まで
3	田口 玄一郎	生き方としての教育哲学
4	佐藤史伸	RO農法探求
5	中川李梨子	「ことばの観察」
6	岩本晃子・佐伯美和・佐々木順子・永野馨	自由学園の音楽を知る
7	竹上尚子	書道探求
8	濱野稔子	本をめぐる心と体の旅
9	高松功太郎	レインボー・プロジェクト
10	金井知子・山岸稜	造形探求

図 1-3



2025 年度　中等部 1 年　探求の学び　概要説明

【学びの流れ】

全 5 回の学習を経て探求の基礎を練習してきました。

回数	日付	内容	時間
①	5/31	検索と引用の仕方	2時間
②	6/7	ほんとうの図書館の使い方	1時間半
③	6/14	シンキングツールの使い方	1時間半
④	6/28	上級生の探求中間発表を見学する	3時間
⑤	7/5	プレゼンテーションとは（Show&Tell）	2時間

【中 1 のテーマ】

約 10 時間かけて、1 学期に学習したことの実践を行いました。

各グループで相談し、以下の3つのテーマから選択し、表の流れで準備を進めました。

① 捨てられた魚・・・外来種なら殺しても良い？

② それは希望？絶望？・・・AI は必要？いらない？

③ 災害が起こるとわかっている土地には住むべきではない？（馬石島を中心に）

①②は池上彰『正解のない問題集 ボクらの解答編』（2022 年、学研出版）より抜粋しました。

回数	日付	内容	時間
①	7/12	1・3組：テーマ選び/チームで相談/役割分担/調べ始め 2組：別プログラム	（1時間）
②	9/6	各テーマ15個の問いに挑む/仮説を立てる/調べる （2組はテーマ選びから開始）	1時間半
③	9/20	各テーマ15個の問いに挑む/仮説を立てる/調べる	1時間
④	9/24	まとめる/他チームのいいところを参考にする/ポスター下書き	3時間半
⑤	9/25	発表の練習/ポスター本書き/補足資料作成	3時間半